様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２５２６

研究課題名（和文）書き換える女たち：キャサリン・フィリップスとアフラ・ベーンによるキャノン書き換え

研究課題名（英文）Women Refashioning Canons: Refashioning by Katherine Philips and Aphra Behn

研究代表者
竹山　友子（TAKEYAMA, Tomoko）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：９０４６２１４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：女性作家によるキャノン書き換えというテーマに沿って、キャサリン・フィリップスとアフラ・ベーンによる古典作品や初期近代の作品を含むキャノン（権威的作品）のジェンダー的書き換え作業に焦点を当てた。特に個人的心情が表出されている詩作品を中心に考察した。フィリップスにおいてはダンの奇想のジェンダー的書き換えを指摘するとともに、アリストテレス、プリニウスから中世のロジャー・ベーコンを経て初期近代のアグリッパ、サックリング、カウリーなどに受け継がれてきた伝統的奇想をフィリップスが利用していることを明らかにした。ベーンにおいては古典作品の影響に加えて、シェイクスピアのソネット集との類似性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
初期近代英国の女性作家によるキャノンの書き換えに関する研究は、原本・底本が判明している劇作品や翻訳・翻案作品を中心に行われてきた。しかし詩については原本・底本の存在の有無の判断が難しいことから、いまだ十分な考察がなされていない。本研究では創作詩および翻訳詩など「詩」を中心に原本や底本となる聖書、古典作品、同時代作品との共通点を探り、女性作家による改変部を分析することで、女性作家フィリップスとベーンがいかにキャノンを自らのためにそして女性のために利用したか、その巧妙な表現技法と意図を明らかにし、初期近代英国における女性作家の系譜作りの一役を担うものとした。

研究成果の概要（英文）：With the theme of "Women Refashioning Canons," this research focuses on Katherine Philips's and Aphra Behn's engendered refashioning of canons of classics and works in early modern England. It mainly analyzes their poetry due to its tendency to show writers' personal thoughts. The research clarifies that Philips appropriates John Donne's conceits for her purpose, and that she also utilizes a traditional conceit which has been inherited from Aristotle and Pliny to early modern writers such as John Suckling and Abraham Cowley. It also points out Aphra Behn's refashioning of or influences from Shakespeare's Sonnets as well as the works of classics.

研究分野：初期近代英国詩

キーワード：初期近代　詩　女性　キャサリン・フィリップス　アフラ・ベーン　イングランド　奇想　古典作品

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 近年、女性作家による書き換えに関する研究はなされてきたが、その多くは翻訳作品についてであった。1990 年代からメアリー・シドニー・ハーバートの *The Tragedy of Antonie* に関して原作の Garnier 著 *Marc Antoine* との違いが指摘されるようになり（S.P. Cerasano and Marion Wynne-Davies, *Renaissance Drama by Women: Texts and Documents*, 1996 など）、Jamie Goodrich は著書 *Faithful Translators: Authorship, Gender, and Religion in Early Modern England* (2014)において 16 世紀の英国女性が翻訳の過程でいかに自身の考えを反映させているかを明らかにした。Deborah Uman は著書 *Women as Translators in Early Modern England* (2012)において 16 世紀後半から 17 世紀の女性の翻訳作品とその原作を比較してジェンダー的書き換えが行われていることを明らかにしている。しかしいずれも翻訳作品が中心で、さらに Goodrich は研究を宗教作品に特化し、Uman は一部の章を除いて翻訳劇を中心に扱っており、詩に関する考察はほとんどなされていない状況であった。

(2) 本研究代表者はこれまでに特に 16 世紀から 17 世紀初頭の女性作家のジェンダー的書き換えに関する研究を行ってきた。ペンブルック伯爵夫人メアリー・シドニー・ハーバートの詩編翻訳 *The Psalmes of David* (c.1599 完成)におけるジェンダー的翻案、エリザベス・ケアリの劇作品 *The Tragedy of Mariam* (1613)における原作のヨセフス著『ユダヤ古代誌』（*Antiquities of the Jews*）のジェンダー的加筆、エミリア・ラニヤーの詩集 *Salve Deus Rex Judaeorum* (1611)におけるアダムとイヴの原罪部分の書き換えとその源泉となる作品を明らかにした。

２．研究の目的

(1) これまでに本研究代表者が行った研究では、主に 16 世紀後半から 17 世紀初頭にあたるエリザベス朝からジェイムズ朝の女性たちによるキャノンの書き換えを対象としたが、本研究はそれをさらに発展させて、彼女たちの後継者にあたる 17 世紀半ばから後半の共和制時代から王政復古期に活躍し、同時代の男性作家たちによる認知度も高かった二人の女性作家キャサリン・フィリップスとアフラ・ベーンに焦点を当てる。フィリップスは詩だけでなく翻訳劇も有名で、ベーンは劇作家として人気を博し、さらには翻訳や散文作品もあるが、本研究では特に著者の心情が表出されている可能性の高い詩を研究対象として考察する。

(2)「女性作家によるキャノン書き換えの試みとその意義」を主題に、作品の特徴とその手法、背景、作品が後世に与えた影響等を明らかにしていく。そして 16 世紀から続く女性作家のジェンダー的書き換えの系譜が 17 世紀後半まで受け継がれていることを示す。

３．研究の方法

(1) キャサリン・フィリップスの決定版テクストである*Poems By the most deservedly Admired Mrs. Katherine Philips The matchless Orinda* (1667)およびアフラ・ベーンの*Poems upon Several Occasions: With a Voyage to the Island of Love* (1684)の精読により、先行研究では取り上げられることの少なかった詩および新たな解釈の可能性が生じている詩の分析。

(2) フィリップスの作品に見られるジョン・ダンの奇想、特に*Songs and Sonnets*に収録される詩における太陽の表象を用いた奇想の類似点と相違点を分析し、その技法と意図を考察。

(3) フィリップスが利用したと思われる古代ギリシアから受け継がれる奇想の伝統を考察し、フィリップスが伝統的奇想をジェンダー的視点で利用していることを分析。

(4) 時代的にフィリップスとラニヤーの中間に位置するマーガレット・キャヴェンディッシュによるジェンダー的詩作の分析。

(5) アフラ・ベーンの詩におけるセクシュアリティ描写において、これまで論じたホラティウスやオウィディウスの古典作品の影響および書き換えに加え、シェイクスピアのソネット集との比較考察、類似点と相違点の分析。

４．研究成果

(1) フィリップスの作品に見られるジョン・ダンの奇想の影響を考察する研究発表"'[A]' Lady above the Sun: Katherine Philips's Dexterous Use of the Images of Donne's *Songs and Sonnets*"を、アメリカで開催された2018 Sixteenth Century Society and Conferenceで行った。フィリップスとダンの詩に見られる太陽の表象を中心に類似点と相違点を分析した。ダンの作品では「太陽の地位低下」「侵入者・監視者としての太陽」「閉じ込められない太陽」という三つの観点から、話者が太陽を否定的に捉えてその支配を試みるが、結局太陽による支配から話者の（異性）愛が抜け出させないことが露になる。一方で、フィリップスは親友ルーケイシア(Lucasia)についてうたう詩群で、同様の特徴を持つ太陽の奇想を利用している。しかし、フィリップスの詩においては太陽を超越

する女性が描写されることで、女性同士の友愛が異性愛を超越しているさまが表されていることを本発表で明らかにした。加えて、ルーケイシア詩群には含まれていない“An Answer to another perswading a Lady to Marriage”においてもダンと同様の太陽の奇想が用いられていることを示し、その描写法が先に考察した詩と類似していることから、この詩もルーケイシア詩群に含まれる可能性があることを指摘した。

(2)フィリップス及びベーンに影響を与えたと思われる同時代のエイブラハム・カウリーと、17世紀初頭のエミリア・ラニヤー、そして二人とほぼ同時代に活躍したマーガレット・キャヴェンディッシュとの共通点や擬人性の用い方を分析し、シェイクスピア学会にて研究発表、さらに書籍出版（共著）を行った。時代も性別も違う三人であるが、樹木の性別である擬人性に焦点を当てると、一つの詩で擬人性を変化させるラニヤー、詩によって擬人性を使い分けるカウリー、時代によって擬人性を変化させるキャヴェンディッシュと、いずれも擬人性を意識的に詩に取り入れて、話者と大切な人との絆を破壊する樹木に対する敵対心や樹木との絆・一体感を効果的に表現している。それぞれの詩を考察すると、詩における樹木の擬人性が詩人自身の男女観やその執筆背景を色濃く反映させ、自らの心情や状況を樹木の生死に結び付け、人間と自然との真の絆を理想の形として訴えていることが判明する。いずれの詩においても、擬人性は詩人の意図を正確に読み解く鍵となっている。三人の作品は詩という共通点はあるものの、時代・ジャンル・文体がすべて違う。その上でジェンダー的視点から類似点と相違点を見つけ出し、初期近代英国の女性作家二人のジェンダー的視点―樹木に寄り添う女性―を明確にした。17世紀初頭の女性作家ラニヤーはフィリップ及びベーンの女性作家としての先駆け的存在である。また、共和制時代から王政復古前半に活躍したキャヴェンディッシュはフィリップスとベーンの間の空白期の懸け橋となり、ジェンダー的書き換えを行う女性作家の流れに継続性を持たせることができた。

(3) アフラ・ベーンの詩におけるセクシュアリティの描写において、これまでに論じたホラティウスやオウィディウスなどの古典作品からの影響に加え、シェイクスピアの『ソネット集』との類似性を研究し、オープンセミナーにて発表を行った。特に現代的視点であるLGBTQの観点で二人の詩作品を分析することにより、いずれの作家も性やジェンダーの曖昧性を肯定的に描写していることと、その共時性と通時性を明らかにした。まず『ソネット集』に見られるホモソーシャリティ、ホモセクシュアリティ、ミソジニーの関係性を分析し、美しい青年貴族に対する男性話者の感情がホモセクシュアルなものかホモソーシャルなものかを考察した。また、話者と青年のジェンダーに関する考察、さらにダーク・レディが二人の関係にもたらすジェンダー的役割を探った。そしてアフラ・ベーンのセクシュアリティをテーマとした詩を考察し、シェイクスピア同様にジェンダーが曖昧な相手とのホモソーシャルとホモセクシュアルとの境界が曖昧な関係をうたう詩であることと、用いられている語句が持つ共通のイメージなど、類似性を明らかにした。

(4) キャサリン・フィリップスの二つの詩に見られる天日取りレンズ（Burning glass）の奇想に着目して、フィリップスが影響を受けたとされる作家たちを調べる研究に取り掛かった。天日取りレンズの奇想の伝統を考察し、古代ギリシアのアリストテレス、プリニウスから中世のロジャー・ベーコンを経て初期近代のアグリッパ・フォン・ネッテスハイム、ジョン・サックリング、エイブラハム・カウリーなどに受け継がれてきた伝統的奇想をフィリップスが利用していることを、十七世紀英文学会関西支部例会での研究発表にて明らかにした。フィリップスの先駆者および同時代の男性作家たちの用法を分析すると、フィリップスはシェイクスピアやダンなど 16 世紀後半から 17 世紀半ばごろまで盛んに用いられた天日取りレンズの奇想の系譜を継いでいることが判明する。その用法は主に二つに分かれ、一つは科学的な太陽光の収斂発火の機能に基づいた奇想である。もう一つは多くの男性詩人が用いた神話的伝承を元にした邪眼、自発的発火の機能に基づいた奇想である。後者の神話的伝承に基づく奇想は、神話的動物の目・邪眼と結びつけられて女性を否定的に表現するのに用いられることが多い。フィリップスが 1652 年から 1654 年に書いたと推定される“To the Excellent Mrs. *Anne Owen*, upon her receiving the name of *Lucasia*”は、その表現や語句からカウリーの天日取りレンズの奇想の影響を受けたと考えられる。そして友情をテーマとする対話詩“A Dialogue of Friendship multiplyed”については、それ以前にフィリップスが友情について質問をした聖職者ジェレミー・テイラーからの返答に対する応答詩の可能性が高い。しかし、フィリップスの場合は多くの男性作家が用いた否定的イメージを帯びた神話的伝承に基づく奇想ではなく、あくまでも太陽の光を増強させる肯定的な器具としての奇想である。フィリップスに科学的知識が特別にあったと考えられてはいないが、この奇想は当時の最先端の科学と文学の正しい融合を主張する表現となり、詩においても自らが主宰する The Society of Friendship においても女性自身の力と友情の力を訴えるフィリップスの姿勢が、天日取りレンズの奇想に現れていることを本発表で明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 竹山　友子
２．発表標題 キャサリン・フィリップスの詩から紐解くBurning-glassの奇想の系譜
３．学会等名 十七世紀英文学会関西支部第214回例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tomoko Takeyama
２．発表標題 ‘[A] Lady' above the Sun: Katherine Philips's Dexterous Use of the Images of Donne’s Songs and Sonnets
３．学会等名 2018 Sixteenth Century Society and Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 竹山　友子
２．発表標題 性別を与えられた樹木とその背景―ラニヤー、カウリー、キャヴェンディッシュを中心に―
３．学会等名 シェイクスピア学会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 青木　愛美，岩永　弘人，吉中　孝志，本多　まりえ，丹羽　佐紀，岩田　美喜，佐野　弘子，中山　理，冨樫　剛，竹山　友子，川田　潤，大久保　友博	４．発行年 2019年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 284
３．書名 十七世紀英文学における生と死	

１．著者名 冨樫　剛，岩永　弘人，竹山　友子，笹川　渉，野呂　有子，大久保　友博，西山　徹，松田　美作子，久野　幸子，高橋　正平，本多　まりえ，梶　理和子，Akiko Ikeda，村上　世津子	４．発行年 2017年
２．出版社 金星堂	５．総ページ数 334
３．書名 17世紀の革命／革命の17世紀	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考